

公共文化施設ができること

～わがまちのシンボル・文化の城に～

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 s あん横浜市磯子区民文化センター杉田劇場 館長 中村牧

全国各地には、公民館や県民ホール、県民文化会館など、(公財)全国公立文化施設協会に正会員登録されている施設だけでも、1,300 を超え、加盟していない施設を含めると 3,000 ほどの公共文化施設がある。1980年代に大阪や東京に民間の 2000 席規模の大きなホールができ、それに追随するかの如く、全国各地にも、お洒落なネーミングを持つ大きな公共ホールが建設されている。専門の人材を全国から集め、配置し、運営しているところもあるが、大多数は、その運営や経営に、少なからず悩みを抱えている。なぜかといえば、施設の管理、特に施設は劣化するものだということを建設するときに、あるいは、それぞれの都道府県の議会で承認するときに想定していないため、建設時には多額な予算を計上して、税金を投入するものの、時が経ち、修繕が必要になるときに、人命にかかわらない工事はなかなか優先してもらえず、長期修繕でリニューアル工事をしない限り、オープン時の輝きをホールに、会館に求めるのは物理的に難しい。

文化施設の管理運営を担う多くの職員は、日々の運営において、絶えず人材の確保やランニングコストの削減、小破修繕費の捻出に奔走し、施設の管理だけで疲弊し、本来の設置目的である施設を通じた文化振興、文化活動の推進などを推し進める半ばで、あるいは、そこまでもいかないところで、人事異動。なかなか志しがあっても、全うすることが難しい。ここ 15 年ぐらいは、民間の活力を生かし、専門性を高め、人の入れ替えで文化振興が途絶えないように、指定管理制度が導入されてはいるが、指定管理料で縛られている。文化庁や(公財)地域創造などの助成金を獲得できる施設も一部はあるものの、文化事業そのものに対しての助成金であり、全国の文化施設、ハコそのものに、新たに大きな資金が動くことはなかなかないと思う。

こう、現状を話していくと、一見、未来がないように感じるかもしれないが、突破口はある。ヨーロッパの劇場(施設)は何百年もの時を経た今でも、しっかりとしたカタチで残っていることが多く、なおかつ、今も大事に新しい流れを取りいれて、息づいている。長い年月をかけて、人々の手で、劇場(箱)を守り、愛する劇場を未来に残そうと修復し、存在そのものが、その国の人々の誇りとなっている。そこに勤める職員も、その劇場に勤めていることを誇りに思っている。文化に誇りを持つ風土は日本にもある。ただ、戦後以降につくられた公共文化施設を文化財産だとなかなか思っていないことにも、ひとつ問題があるような気もする。

長く文化施設の運営に関わってきた中で、よく耳にする声がある。管理担当者は、施設の管理はやっているが、自身は文化の素人だから文化がわからないという声。でもそんなことはない、文化施設の管理は立派に文化の仕事の一環。堂々と文化にかかわる仕事をしていると自負していいと思う。そして、もっと、文化の力を信じ、文化の力に幸福を感じ、この仕事に誇りを持ち続けることをあきらめないで

ほしい。そういう人が増えていくことで、施設の未来が変わる。そのまちの文化と積極的にかかわっていくことで、施設の未来が変わる。

確かに、施設(建物)の維持管理は、どんな施設であろうと、学校であろうと、商業施設であろうと、たいへんだ。ただ、私たちが守っている施設は、文化施設。文化というところに、夢があり、未来がある。文化の力は国の力だ。文化は見えないけれど、限りなく力があると、おおよその日本人、人々は信じている。私も固く信じている。そこで、文化振興をするためにある箱をどう活かしていくか、大きな資金がすぐになくてもできることをしていく。文化とまちの人々との関わり、文化活動に関わってこなかった人たちにも、拠り所となるようなアプローチを地域住民とともにおこない、文化的活動を大事にしている人々の共感を力に変えていく根気のいる仕事を地道に続け、地域を巻き込んでいくことが、その地に居を構える文化施設の使命なのだと思う。

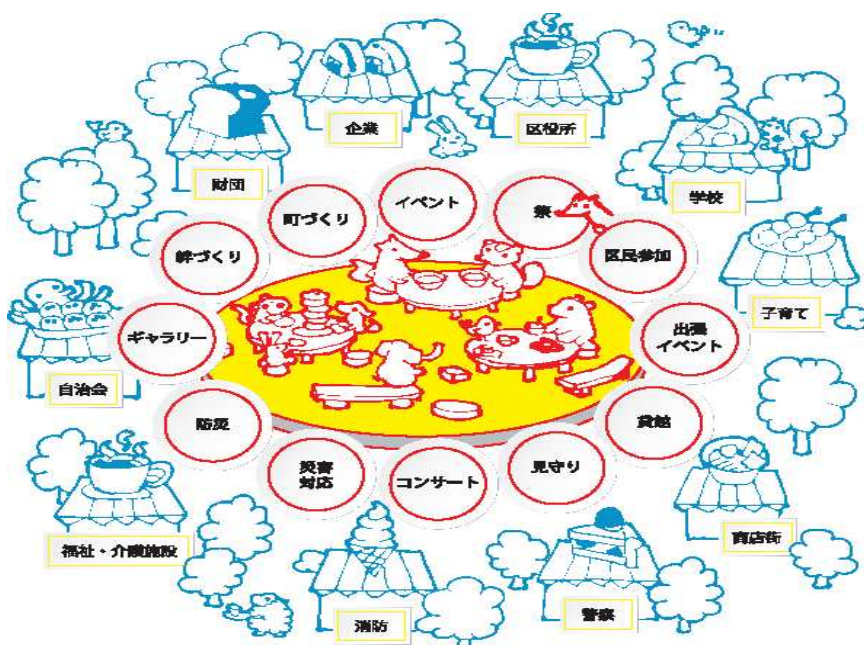
文化施設はそのまちの文化の拠り所として、外国にルーツを持つ方や障がいのある方、社会的に困難な境遇にいる方などを含めたあらゆる人が文化を通して集い交流する場、広場になり、わがまちになくってはならない心の支え、文化の城にならないといけないと思っている。

私たち、公共文化施設の運営を担うものとして、これからでも、できることは何か。

文化施設をあらゆる人たちのための文化の拠点にすること。

文化の拠点にすることで、住民から認められ、地域から認められ、学校から認められ、ほかの施設から認められ、行政から認められ、地元議員から認められ、議会で認められ、そこで初めて、八コもの行政として揶揄されてきた文化施設が市民権を得て、議会で対等に、文化施設の継続性や存在価値をアピールできるのではないと思う。そこまで、文化施設が力をつけることで、はじめて、未来が開ける。おそらく、ヨーロッパの劇場もそうだったに違いない。

ここからは、磯子区民文化センター杉田劇場が区民といっしょに歩んできた 15 年の事業を簡単に紹介する。



第 1 期 (2005 年 2 月 5 日 ~ 2010 年 3 月)

<コンセプト> 区民協働
オープン当時

「地域に愛されなければ、私たちは、ここにはいられない」という覚悟をもって、スタート。

○区民参加の推進

磯子区内の文化資源をめぐる「いそご文化資源発掘隊」開始。
ボランティア組織「杉劇@助っ人隊」活動開始。

区民アイデア事業リコーダーワークショップ開講。杉劇リコーダーず誕生)
 区民参加の演劇やミュージカル公演の実施。
 劇場全館を開放する「夏祭り」「冬まつり」開始。
 未就学児向けコンサート「ひよこ コンサート」開始。



いそご文化資源発掘隊の街歩き

るか、不安を抱えてのスタート。まず最初にしたことは、オープン前から地域との顔つなぎ。そこから生まれてきた事業の数々。

第2期（2010年4月～2015年3月）

<コンセプト>

いそごの文化がまちを育くむ。
 磯子の地域力・区民力を活かし
 文化力で地域や人をつないで住み続けたいなるまちづくりに貢献する



リコーダーずのこどもたちが小学校の教科書に掲載

新しくできた商業施設(2009年9月29日オープン)の4階部分(杉田劇場)に、地域の間でない新参者として、横浜市芸術文化振興財団の職員が杉田劇場スタッフとして着任。

全国的には、指定管理者制度導入後の最初の指定管理者として注目を集めていたものの、文化施設ができることに反対していた多くの地元住人がいる中、行政が設置した区民文化センターをどこまで受け入れてもらえ

○自主活動団体の誕生 アウトリーチ活性化

磯子の歴史や文化を演劇や紙芝居にして円実区民による地域密着型エンターテイメント集団「杉劇 歌劇団」誕生。定期公演の実施の他、出張パフォーマンス等実施。

平成25年度から磯子区と共同主催により「磯子音楽祭」を開始。

区民の交流の場として「杉劇ちょこっとカフェ」を開始。



リコーダーズが神社の大例祭で奉納演奏

商店街の店主が結成した「イメージISOGO」や、地元の主婦を中心に結成された劇団「横綱チュチュ」が活動を本格化。地域へのアウトリーチ、杉田臨海緑地でのライブ等実施。

こどもとゴールドエイジ（団塊の世代以上）で構成された「杉劇リコーダーズ」による定期演奏会の実施や、学校や福祉施設等へのアウトリーチの実施等、活動の本格化。2013年には被災地・気仙沼で演奏。

第3期（2015年4月～2020年3月）

<コンセプト>

文化の力で区民力と地域力を最大限に引き出してまちづくりと人づくりに貢献する



仲間の応援団

- 地域課題を意識した事業展開
- 自主活動団体の活動拡大（アウトリーチ）
- 地域ネットワークの拡大

地域の伝統文化の伝承普及を目指す「アート de 伝承プロジェクト」開始。

区内の神社等のお祭りやお囃子の調査。地域のお囃子団体を「杉田劇場冬まつり」で紹介。区内在住の笙奏者による舞楽と雅楽を小学生に解説つきで上演する機会をつくる。

区内小学校と連携し、こどもたちが杉田劇場で文化芸術体験を行うことができるプログラム「杉劇アート体験塾」を開始。

放課後のこどもたちの居場所、見守りの場をつくる「ちょこっとカフェこども版」開始。

区内文化団体・施設・行政の代表者のネットワーク「いそご文化円卓会議」開始。

いそご文化円卓会議で地元のリオ・オリンピック選手を応援しようということになり、垣根を越えて、スポーツセンターではなく、文化センターの杉田劇場で行う。真夜中から杉田劇場を開けて、パブリックビューイングをホールで。



大学生の応援団



地元の大人の応援団



障がい個性として活躍する画家

第4期（2020年4月～ ）

<コンセプト>

あらゆる人が集い、笑顔あふれる広場に

- 多様な区民の社会参画の機会創出
- 文化的コモンズ形成

これからも時代は変容する。AIの時代がもうすぐやってくるが、文化を求める人々は、今より必ず多くなると思う。文化施設としてできること、求められることも多くなる。社会が文化を必要としている時代になっている。地域の問題を文化の力で解決するという時代になっている。文化の力を発揮する時代になってきたのだと思う。多様な住民たちの声を丁寧にひろいながら、文化施設は成長する。わがまちの文化施設は、文化の拠点。文化の城だ。